

## 生活絵引編纂の世界的意義

福田 アジオ

### はじめに

生活絵引という言葉は聞き慣れない言葉である。日常用語としても学術用語としてもその意味はほとんど知られていない。生活絵引は『絵巻物による日本常民生活絵引』の名称でこの世に登場したものであり、現在でもその限りで研究者の世界で知られているに過ぎない。絵引を英語で何というか、フランス語で何というか知らない。おそらく絵引の適切な訳語は未だ作られていないし、それに対応する言葉はなかったものと思われる。

そのようなユニークな『絵巻物による日本常民生活絵引』編纂の過程を最初に確認し、次にその特色を明らかにしたい。そして、現在試みつつある日本近世生活絵引編纂の一端を紹介することを通じて、生活絵引編纂の意義を考えたい。

### 1. 日本常民文化研究所

現在、神奈川大学に日本常民文化研究所というユニークな研究所が付置されている。日本の私立大学には多くの研究所が設置されているが、その大部分は学部の教員の研究活動を支える組織であり、研究費分配の組織である。独自の目標と内容を備える研究所はほとんどない。そのなかで、神奈川大学日本常民文化研究所は、特定の学部基礎を置かず、大学を構成するどの学部の研究教育内容とも対応しない研究所である。これは、その来歴が深く関係している。

日本常民文化研究所はもともと神奈川大学に設置された研究所ではなく、民間の財団法人として活動してきた機関であり、その活動の独自性から広く知られた研究所であった。それが財政難から神奈川大学に移管されたのが1982年のことであった。神奈川大学の研究所になることによって、財政的基盤は安定し、それまでの活動を継承発展させることができたが、同時に私立大学の付置研究所として多くの制約を受けることになった。その最大の致命傷が専任所員がないことである。私立大学の設置する研究所は、その性格もあって、ほとんどが専任の所員を置いておらず、学部や大学院の教員が兼務する形式をとっている。日本常民文化研究所も同様で、専任所員はおらず、各学部の教員が兼任で所員となり、教育の合間を縫って、わずかな余力を注ぎ研究しているのが実態である。

日本常民文化研究所が設立された年をいつと考えるかは意見が分かれるところであるが、ここでは1925年としておきたい。明治の実業家澁澤栄一の孫で、本人も実業界で活躍した澁澤敬三が、友人たちとはからって、自宅にアチックミュージアムと称する研究所を作ったことに始まる。その屋根裏博物館という名称が示すように、趣味で収集していた各種資料を展示する博物館という側面をもったが、活動の中心は澁澤敬三の豊かな資金によって行う調査研究とその成果の刊行にあった。アチックミュージアムの活動は、民俗・民具・文書の三つを柱とし、しかもそれらを統合する調査を行うところに特色があった。今では広く用いられている民具という用語も、澁澤敬三によって作り出されたものである。なお、アチックミュージアムは、1942年頃に、日本常民文化研究所と改称し、現在に引き継がれている。

## 2. 『絵巻物による日本常民生活絵引』

アチックミュージアムを主宰する澁澤敬三は、幅広い視野をもっており、忙しい本務の傍ら、自らも調査研究にあたった。そのなかで、注目するようになったのが歴史資料としての絵画であった。学問研究のための基礎データを蓄積することと、それを情報として発信することの必要性を強く感じていた澁澤は、『世間胸算用』、『東海道中膝栗毛』、『地方凡例録』などさまざまな文献についての語彙索引を作り（『文献索引』1935・36）、自らも『日本漁名集覧』（1942～44）を編纂執筆している。この延長上に、絵画資料を窓口にする絵引の構想があった。

澁澤は、1940年に絵巻物研究会を発足させ、絵巻物を歴史資料として活用するための方策を検討した。それ以前に澁澤は足半あしなかの研究を行っていたが、その歴史を明らかにする資料としての絵巻物の発見があったと思われる。民俗学研究者であり、日本画家でもある橋浦泰雄に依頼して、絵巻物を模写し、そこに描かれた事物に名称を付すという作業を開始した。民俗学研究者である橋浦は、絵巻物の単なる模写ではなく、生活を描いた部分を抜き出す形で模写し、関連の薄いものは省略した。そして研究会では、事物に名称を与えていった。この作業は戦争の激化の中で中断し、しかも橋浦の模写絵は焼失してなくなってしまったのである。しかし、澁澤の絵巻物を歴史資料として使えるための索引作りの情熱は失われなかった。第2次大戦後に再び取り組むのである。

1954年に澁澤は、「絵引きは作れぬものか」という短文を発表して、絵引という概念を提示しつつ、編纂事業再開の夢を語った。そして、翌年には研究会は再開され、新たに日本画家村田泥牛が依頼され、絵巻物の模写が開始された。研究所の多くのメンバーが参加して作業は熱心に進められ、澁澤の没後の1965年から刊行された。それは、絵巻物に描かれた画面を①切り取り、②模写の過程で不必要な背景などを消し去り、人々の生活場面を強調するかたちで描き、③そこに番号を振り、④事物の名称を与えると共に、⑤その図柄から読み取った内容を解説文として付けるという方法で作られた、まさに絵から事物を知るという絵引であった。絵引は絵巻物の作品単位に編集され、全5巻として完成した。量が少ない絵巻物の場合は、複数の絵巻物で1巻とし、大きな絵巻物は単独で1巻にした。『一遍聖絵』などはその代表である。

## 3. 『絵巻物による日本常民生活絵引』の独創性

『絵巻物による日本常民生活絵引』に示された編纂の特色は、以下の諸点であろう。

第1に、過去の特定の時期に描かれたことを重視し、描かれた場面を尊重している。不必要と判断された背景や情景は省略されており、絵巻物の場面そのものではないが、全体としては描かれた絵画そのものを絵引として用いている。そのことによって、描かれた時代の特色を把握できる可能性を残そうとしている。勝手な補筆による変更は行われていないし、新たな追加もない。

第2に、徹底して個別の事物に名称を与えようとしている。描かれた事物を注意深く観察し、その事物は当時何と呼ばれていたかという歴史的な名称を与え、さらに加えて、現代の言葉では何と呼ぶべき事物かという点にも注意している。字引に対する絵引であるという、絵から事物を知るという方式を追究していると言える。

第3に、個別の事物に分解せず、事物相互の関連、関係性を重視している。装飾品と衣服とその姿が描かれた空間が相互に関連して理解できるように、図像を完全に個別事物に分解せず、組み合わせとして示そうとしている。頭の装飾品と衣服と履物の組み合わせが分かり、しかもそれが路上であるのか、屋敷内であるのか、また社寺境内であるのか分かるように、場面をある程度の広がりの中で切り取っている。この点が非常に重要である。

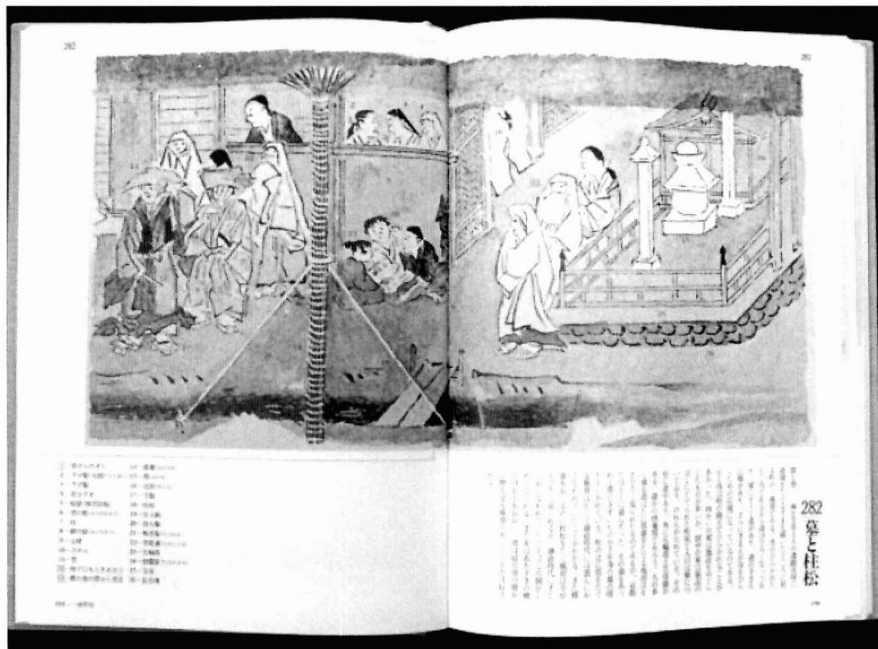


図1  
新版『絵巻物による日本  
常民生活絵引』  
(2巻, PP. 190~191)

これら3点は『絵巻物による日本常民生活絵引』の誇るべき特色であり、絵引類似本には見られない点である。絵引類似本ともいえるべき一連の刊行物がある。絵引類似本の第1種は、図解辞典である。字引に対する絵引という言葉に表面的に対応する辞典が、図解辞典である。語学の初学者向けに世界各地で編纂刊行されているもので、辞典のために新たに描いた図に番号を付けたり、矢印を付けて、その名称(単語)を示すものである。事物を具象的に知ることができ、難しい説明抜きに単語の意味を知ることができる。これは、語学の辞典だけでなく、仏像の各部位を示すときや、建造物の部位を示すときにも用いられ、各種辞書類の中には多かれ少なかれ採用されている。

類似本の第2種は、過去の図像を切り取り、主題ごとに並べている図典である。それらは絵巻物を参照していても、それを分かりやすく描き直していることが多いし、詳細な点まで事物を取り出して名称を与えていないのが一般的である。そして、事物のみを単独で描くことが多い。組み合わせで描くことはほとんどない。逆に場面全体を切り取って編纂したものは、個別事物の名称はなく、またそれへの読み取りもなく、全体的な印象による解説にとどまっている。

これらの特徴は、近年多く刊行されている、絵画資料によって生活・風俗を描き出そうとした事典についても言えることである。したがって、日本においては、『絵巻物による日本常民生活絵引』以降に、未だ一つも本格的絵引は編纂されていないということになる。恐らく、世界的に見ても、過去に描かれた図像そのものに基づいて絵引という方式の事典を編纂した試みはないのではないかなと思う。その点で『絵巻物による日本常民生活絵引』はユニークな存在であり、日本から世界へ発信できる成果であると言えよう。

「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という課題で21世紀COEプログラムに採択された私どもは、研究事業の一つの柱に、先輩たちがおこなった『絵巻物による日本常民生活絵引』を継承発展させ、絵引を世界的な共有財産にすることを設定した。まずは『絵巻物による日本常民生活絵引』を世界に紹介し、世界各地で日本研究に活用できるようにすると共に、その編纂方式を示すために、マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂を進めている。これは『絵巻物による日本常民生活絵引』の事物についてのキャプションを英語・中国語・韓国語・フランス語に訳し、また読み取り解説文を英語訳して、編纂刊行す

るものである。事物と日・英・中・韓・仏語対照表をデータベースとして完成させることも副産物として目指している。

そして、中世までが対象であった『絵巻物による日本常民生活絵引』の編纂方式を近世・近代にまで拡大し、『日本近世・近代生活絵引』を編纂することに取り組んでいる。この5年間では、日本近世の生活絵引の編纂を、いくつかの地方において試み、試案本を完成させることとしている。本日披露する試みはその一部になる予定のものである。

そして、三つ目は、このようなユニークな絵引編纂方式を日本以外で実験することである。実際には、『東アジア生活絵引』の編纂を、朝鮮時代の風俗画による生活絵引の編纂、清の乾隆時代の「姑蘇繁華図」による生活絵引の編纂として進めている。

絵引編纂を世界的な規模で進める場合に、検討しなければならない問題がある。それは世界中どこでも生活を描いた図像資料が存在するかどうかということである。さらに、絵に描くことが日常的にどの程度親しみのあることであり、また描いてきたかという問題が検討されなければならない。日本においては近世以降、人々は絵画に日常的に親しむようになっていたと考えられる。特に近世中期以降、多くの書物が挿絵を多く挿入し、挿絵中心の書物となっていた。小説類の挿絵は物語のイメージを増幅させるためのものであり、想像の産物であったが、それが次第に写実的な描き方をつくり出し、実態に即して対象を描くようになった。18世紀末に刊行を開始した一連の名所図会などはその代表である。さらに、絵師や画工でない人が自ら筆をとって描く素人絵も次第に増えてきた。文字で表現できない事項を絵にして表現することが、日記の中で採用する人もいた。絵日記である。さらに旅に際して目にしたことを絵にする日記も増えた。文字中心であったが、そこに絵が含まれ、絵によって記憶を再現することが行われ、近代の美術教育による絵画へと引き継がれていくことになった。

このような日本の近世以降の図像への親しみは、世界的に共通しているとは思われない。わずかな経験から言っても、同じ東アジアである中国においては日常的な事物を写実的に絵に描くことは清代にはほとんどなかったと言えるほど、日常生活を描いた絵画は少ない。絵日記のような素人絵を発見することもできない。このような事情は中国だけでなく、世界各地で見られる可能性がある。その点で、日本で可能な生活絵引編纂がどこでも同じようにできるとは限らないことを知らねばならない。それぞれの文化による図像のあり方の相違を前提にして、個性ある生活絵引の編纂を追究する必要がある。

#### 4. 日本近世生活絵引編纂の試み—『東海道名所図会』



図2 東海道名所図会

近世後期には、『名所図会』という表題を付けた、多くの挿絵を入れた特定地域に関する地理案内書が多く刊行された。その最初は1780年（安永9）刊行の『都名所図会』全5巻であった。京都市中の絵入り名所案内記で、その作者は京都在住の秋里籬島、絵は絵師竹原春朝斎で、出版は京都の吉野屋為八であった。この『都名所図会』は好評を博し、おおいに売れたという。『都名所図会』に始まる多くの名所図会は、挿絵が大きく、風景や事物を丁寧に詳しく、ときには鳥瞰図として、ときには目の高さで描い

て、読者を絵で惹きつけるものであった。『都名所図会』に成功した秋里籬島は、『大和名所図会』（1791年）、『摂津名所図会』（1796～98年）、『東海道名所図会』（1797年）、『河内名所図会』（1801年）など、続々と企画し、執筆刊行した。『東海道名所図会』はこの一連の作品の中では最も広域的な対象を取り上げており、そこに挿入された挿絵も多く、しかも一人の絵師によるのではなく、5人の絵師の競作となっている。

『東海道名所図会』は、東海道の道沿いに見られる名所旧跡を取り上げ、その地点の絵を描き、挿絵として挿入している。基本的には、先ず古く歌にうたわれたような名所を取り上げ、歌を挿入して紹介し、また歴史上の出来事の舞台となった場所を取り上げて説明すると共に、想像図でその歴史的事象を描いて入れている。挿入された絵は200ほどである。その多くはこのような古典的な名所旧跡である。しかし、それ以上



図3 京都祇園

に注目されるのは実際の宿場の様子であったり、各地の祭礼行事などが挿絵で描き出されていることである。挿入図の約4分の1がこのような図である。『東海道名所図会』は、その独創性は大きく、十返舎一九の『金草鞋』や『東海道中膝栗毛』にも影響を与え、また東海道各宿を描いた広重の絵の構図にも類似のものがある。逆に言えば、『東海道名所図会』の挿絵には、オリジナル性が大きく、資料的価値も高いと言える。

幸いに、我々はこのように価値の高い『東海道名所図会』の1797年（寛政9年）刊本を入手することができたので、これを材料に『日本近世生活絵引』の試案本の3冊目を作成することにして、準備に入った。その構想と手順を以下に紹介する。

① 『東海道名所図会』全6巻に挿入されている挿絵200点をスキャナで読み込み、デジタル画像ファイルとする。

② 200点の図像のうちから生活に関わる情景が描かれている図50点を選択する。

③ 各絵のなかに描き出された事物をできるだけ多く取り出し、それらに名称を付ける。名称は近世に用いられた用語を、関連資料によって確認しつつ記入する。

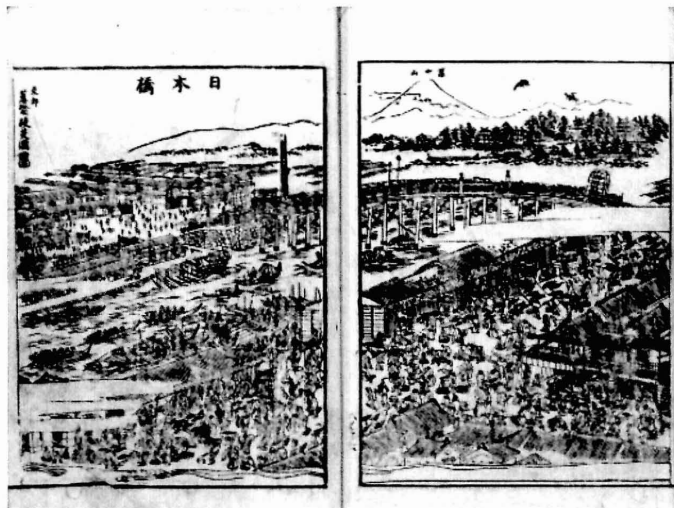


図4 江戸日本橋



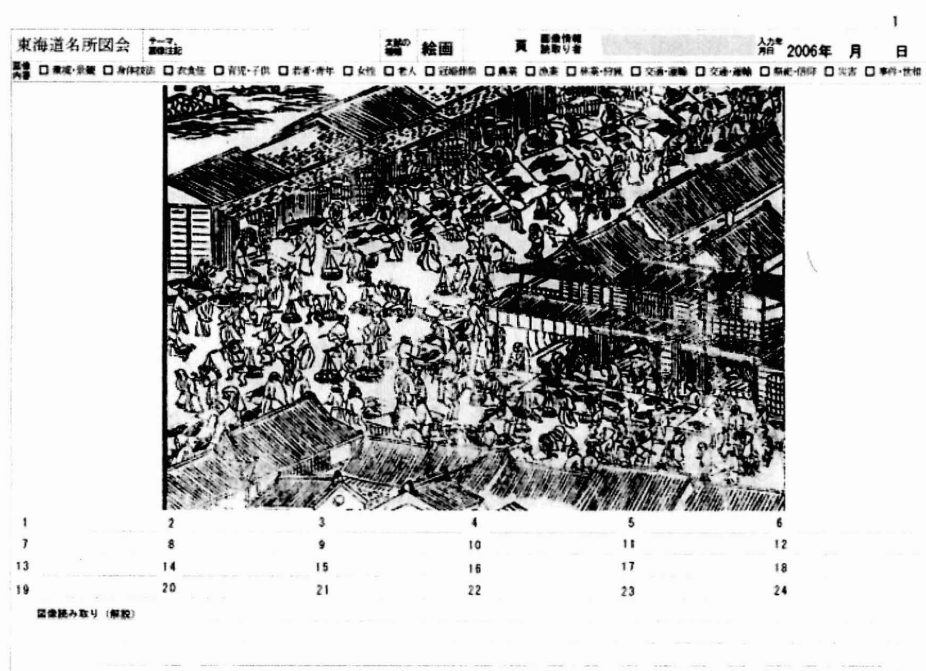


図5 絵引作成用切り取り(1) (日本橋魚市場)

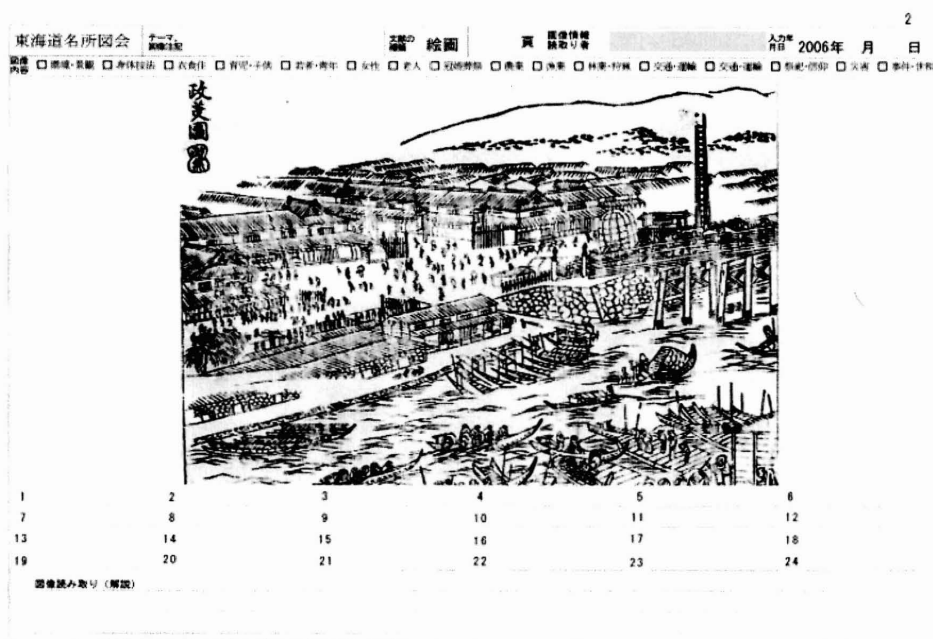


図6 絵引作成用切り取り(2) (日本橋南詰)

④ キャプションを付ける過程で、絵に示された主題を決め、それに関係が弱い部分を省略する形で切り取る。

⑤ 主題を中心に、描かれた図柄全体を読み取り、その意味を説明すると共に、それとの関係で個別事物についても解説する。

⑥ 見開き2ページに1枚の絵を入れ、絵・キャプション・読文を割り付ける。

⑦ 絵50枚によるA4判100ページの試案本として完成させ、『日本近世生活絵引・東海道編』(試案本)として印刷公刊する。

⑧ キャプションとして付けた用語とそれに対応する図を対照させ、双方から検索可能なデータベースとして完成させ、Web上で公開する。

## 5. 生活絵引編集の意義

生活上の事物を文字に記録された資料だけで知ることは困難である。現在の事物であれば、現物を確かめればよい。また過去の事物であっても、現在まで民俗・民具として継続して存在するものも少なくなく、それを手がかりにすることができる。しかし、特定の時間で表示する過去の事物を確認することは民俗・民具ではできない。図像は偶然記録であるが、その価値は大きい。特定の時間の過去において存在した事物や人々の行為を具体的に教えてくれる。それは澁澤敬三が考えたとおりであると言ってよい。字引に対して、新

たに絵引という概念をつくり出し、絵引制作を試みた先駆性は大きい。

生活絵引という、人々の日常生活を図像資料から引き出して、特定の過去の状態を知る手がかりとするユニークな事典編纂の方法は、日本における図像資料の制作量の多さ、豊かさが可能にするものであり、他の社会や文化では同様の絵引は作成不可能という考えは当然存在するであろう。同じ東アジアでも、日本では可能であっても、中国では図像は規範化された描き方をされ、人々の生活を写實的に描くという方法は蓄積されず、したがって生活絵引を編纂する材料がないという歎きも聞かれる。しかし、少ないながらも、対象を人々の日常生活に置いて、写實的に描こうとした作品も存在する。日本ほど豊富ではなく、種々困難を伴うが、絵引編纂は不可能ではないのである。この点は、欧米についても言えるであろう。写実性という点では早くから描かれた図像があり、絵引編纂の可能性はある。『絵巻物による日本常民生活絵引』を発展させた、日本近世・近代生活絵引を編纂することは、絵引が中世の絵巻物だけで可能なのではないことを示すことで、絵引が普遍性をもちうることを広く了解させることになる。

生活史研究のインデックスとしての生活絵引編纂に問題は多く残されている。検討すべきいくつかを掲げれば以下の諸点である。

第1に、図像がどこまで実態を描き、事物を間違いなく描いているかの確認がされなければならない。図像の大部分は、絵師や画工という職業的な絵かきが描いたものである。彼らは修行過程で学んだ約束事に縛られ、特に粉本にもとづく描写が多い。その点を確認し、差し引いて、対象を把握しなければならない。

第2に、生活の地域的特質、すなわち地域性が示されているかどうか検討する必要がある。特に異なる地域の事物を描いた図像が、結果的に同じように描いているとすれば、それは絵師たちのこの事物はこうあるべしという観念に基づいて描かれていることになる。

第3には、描かれた事物がその時間の資料となりうるかどうかの確認が必要である。作品としての年代が、描かれた事物の年代を確定してくれるわけではない。その資料批判をしなければ、生活史としてのインデックスにはならないであろう。

生活絵引の価値は大きい、今後の課題も大きいのである。